

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：17104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00675

研究課題名(和文) 書簡に見るエリザベス一世の言語的特徴と国民言語としての英語観

研究課題名(英文) Linguistic features in the Queen Elizabeth I's correspondence and her linguistic view of English as a national language

研究代表者

平 歩(Hira, Ayumi)

九州工業大学・教養教育院・講師

研究者番号：40761200

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、イングランド王エリザベス一世(1533-1603, 在位 1558-1603)が約60年間にわたって認めた直筆書簡を分析することによって、(1)語彙や統語の変化やその様相、(2)書簡の受け手や趣旨による言語使用や筆跡の変化、そして、(3)国民意識の高揚や英語の評価の高まりを背景に、国民言語としての英語に対する言語観を考察した。

言語変化の先取りをしていた傾向が高かったこと、そして、幼少期から晩年にかけて筆跡は変化したものの、書簡の受け手によって筆致を変えることはなかったことが明らかとなった。さらに、自国語である英語の価値を上げることを重要視していたという結論を導き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、16世紀にイングランドを約半世紀にわたって統治したエリザベス一世の直筆原稿を分析対象とし、その言語的特徴を分析した。先行研究では、彼女の言語的特徴(語彙や統語など)、筆跡の変化、女性為政者としての政治的手腕についての研究がなされてきたが、それぞれの視点を総合的に取り入れた研究は十分に行われてこなかった。また、幾多の困難を乗り越えて来たエリザベス一世の書簡やリーダー像を分析・再評価することで、先行きが不透明で将来の予測が困難な現代社会が得るべき示唆があると期待する。

研究成果の概要(英文)： This study analyses the autograph letters written by Queen Elizabeth I of England (1533-1603, reign 1558-1603) over a span of approximately 60 years. Through this analysis, we examine (1) her lexical and syntactic changes and their aspects, (2) variations in her language use and handwriting influenced by the recipients and purposes of the letters, and (3) her views on the English language in relation to the rise of national consciousness and the increasing evaluation of English as a national language.

The findings reveal a tendency that Elizabeth was an early adopter of the new language use; and that while the handwriting changed from childhood to old age, there was no variation in her penmanship based on the recipients of the letters. Furthermore, we conclude that Elizabeth placed importance on elevating the value of the English language as a national language in England.

研究分野：歴史社会言語学

キーワード：エリザベス一世 イングランド 個人言語(idiolect) 書簡 筆跡 レトリック スコットランド 宗教改革

## 1. 研究開始当初の背景

イングランド王エリザベス一世(1533-1603, 在位 1558-1603)の書簡は、国内政治や権力の座をめぐる人間模様や外交政策への取り組みなどを知るうえで重要な一次資料であり、歴史学者をはじめとした研究者たちに貴重な情報を提供してきた。その一方で、言語学者にとっては、国家意識の高揚、それを下支えする国民言語としての英語の確立過程を解明するうえで非常に貴重な史料となっている。Harrison, G. B., *The Letters of Queen Elizabeth* (1968) の出版に続き、エリザベス一世が幼少期から晩年まで書いたとされる書簡や演説原稿、翻訳、そして詩などを現代英語の綴りにして数多く収録した Marcus, L. S., Mueller, J. & Rose, M. B. (eds.), *Elizabeth I: Collected Works* (2000) が出版されると、詳細な言語分析ができる環境が整った。

本研究に関連した代表的な先行研究としては、Evans, M., *The Language of Queen Elizabeth I: A Sociolinguistic Perspective on Royal Style and Identity* (2013) がある。エリザベス一世の言語的特徴(idiolect)について書簡やスピーチ、翻訳を用いて通事的に社会言語学の観点から検証したもので、即位前後での変化に着目しながら、助動詞 do、多重否定、関係詞(who/which, which/the which)そして、スペリングなどの観点から分析し、エリザベス一世は言語変化を牽引した存在であったと結論付けている。

筆跡および書体に関する研究について、Gibson, J. (2011) はエリザベスの幼少期の書体は、家庭教師でイタリック体の名手であったとされるロジャー・アスカムや、エリザベスにとって最初の英語の家庭教師であったウィリアム・グリングダル等の影響があったと推測している。また、幼少期は丁寧に書いた様子が伺える均整のとれたイタリック体であったのが、即位後は走り書きのような草書体(cursive)に変化したことを示している。

これら代表的な研究は、いずれも質的分析か量的分析のいずれかであり、言語使用者(エリザベス)が置かれた折々の政治的状況や立場、書簡の送り手と受け手の人間関係を考慮しながら双方の分析を同時に行なったものは見当たらない。また、直筆書簡のみに焦点を当てた研究も確認できない。そして、女王にとっての国民言語の形成という視点も欠落していた。そのため、本研究ではこうした視点に配慮しながら、これまでの研究を補うことを目的とした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、エリザベス一世が約60年間に認めた書簡を分析対象とし、以下3点の課題の解明を試みることである：

- (1) 幼少期から晩年にかけて語彙や統語に変化はあるのか
- (2) 書簡の受け手や趣旨によって言語使用や筆跡は異なるのか
- (3) 国民意識の高揚や英語の評価の高まりを背景に、国民言語としての英語にいかなる言語観を持っていたのか

既述した通り、エリザベスの遺文集(Harrison 1968; Marcus, et al. (eds.) 2000)や、文体的特徴に関する通事的研究(Evans 2013)そして、書体や筆跡に関する研究(Gibson 2011)などは先行研究として確認できる。しかしながら、これらはエリザベスの言語使用に対し、当時の政治的、社会的、そして英語の特徴といった質的分析の視点を包括的に取り入れているとは言えない。また、言語使用を特徴付けているであろう書簡が認められたその時々エリザベスの立場や対人関係までも配慮したものは未見である。本研究では、こうした視点に主眼を置きつつ、また、先行研究で提示されている量的分析を再考することで、エリザベスの言語的特徴や人物像への理解を深める一助になると考える。

さらに、イングランドで16世紀後半に始まる古典語偏重からの脱却を背景に、エリザベスの英語観について論じられた研究は見当たらない。彼女は、当代一流の家庭教師からラテン語をはじめとする古典語や修辞法といった言語教育を受けた。彼らは、ロジャー・アスカムを筆頭に、古典語に対する英語の地位向上を推進した人文学者でもあった。こうした教授陣のもと複数の言語に精通したエリザベスは、英語の再評価という文化的背景において、どのような言語観を持っていたのだろうか。本研究では、エリザベスによって認められた書簡を通時的に考察することによって、以上の問いへの答えを探ることを目的とする。

## 3. 研究の方法

まず、一次資料として、Marcus, L. S., Mueller, J. & Rose, M. B. (eds.), *Elizabeth I: Collected Works* (2000) に収録されているエリザベスの直筆書簡、および、直筆書簡との比較のため秘書官や書記官による代筆の書簡を分析した。そして、筆跡調査のため、大英図書館(The British Library)とオックスフォード大学ボドレー図書館(Oxford University, The Bodleian Library)、イギリス国立

公文書館 (The National Archives United Kingdom) にて直筆書簡の画像データを入手した。

さらに、一次資料である書簡の分析に加えて、エリザベスを取り巻く政治的背景や対人関係、その当時の書簡作成の慣習などに関する二次資料を求めて、国内外から資料を取り寄せた。

#### 4. 研究成果

本研究における3つの課題それぞれの顕著な研究成果は以下の通りである。

##### (1) 幼少期から晩年にかけて語彙や統語に変化はあるのか

肯定平叙文の迂言的 *do* (動詞の位置を示す目印としての機能など) の使用については変化(減少傾向)を先取りしたと言える。エリザベスの後継者となるスコットランド王ジェームズ六世(イングランド王ジェームズ一世)への書簡での生起数は特に少ない。スコットランドではこの用法は稀で、エリザベスがジェームズの言語使用に意図的に合わせていた可能性がある。また、綴りについては *does* ではなく *doth* が使われ続けた。人を先行詞とする主格の関係代名詞についても変化を先取りしたと言える。つまり、*who* と *which* の共起が見られていたのが、*who* に固定されていくという変化である。幼少期からすでに *who* を使用していたのだが、この用法は手紙の結びで神に言及する際に使用されており、エリザベスが生まれる前に確立していた。この起源に起因するのか、先行詞が神(God)だと *who* のみが使用されているものの、人を示す普通名詞や代名詞だと若干 *which* が使われている使用例がある。

否定接頭辞の *un-* と *in-* の使用傾向は当時の使用傾向とほぼ一致していた。つまり、*un-* はゲルマン語系の語彙に、*in-* はラテン語系の語彙に付加されていた。昔は *un-* と *in-* が二重語(*doublets*)として共存的に使用されていた時代があった。例えば、現在では一般的な '*uncertain*' のみならず '*incertain*' というかたちも使用されており、シェークスピアの作品でも両方の使用を確認できる。エリザベスの書簡では数例見られた。

##### (2) 書簡の受け手や趣旨によって言語使用や筆跡は異なるのか

[幼少期～即位前]

まず、即位前は、一部を除いて現存するほとんどの書簡がエリザベス自筆によるものである。10代前半の書体は当時の家庭教師たちの影響を受けていたと思われる。フランス語の家庭教師だった Jean Belmain の筆跡を忠実に真似ていたり、エリザベスに女王として必要な知識の多くを教授したロジャー・アスカムやイタリア語の家庭教師が使っていたパラティーノ書体(Palatino)の使用が確認できる。均整の取れた模範的な筆致が特徴的で、受け手によって筆跡を変えているという傾向は見られない。即位前、エリザベスは2つの事件に巻き込まれるが、書簡を護身の武器として認めていく。

「シーモア事件」関連の書簡：

父ヘンリー八世の死後、継母キャサリン・パーが再婚した海軍卿トマス・シーモアと親密な関係になっていると噂が立つ。エリザベスの養育係だったアシュレイ夫人と金庫番だったトマス・パリーが海軍卿との結婚を勧めたのではないかと疑う摂政卿エドワード・シーモアに対して、その疑いを否定する書簡を送る(Cecil Papers 133/4/2)。こちらの書簡は書記官によって認められ、エリザベスは署名のみしている。淡々かつ詳細に事の経緯が説明されていき、摂政卿と枢密院の許可がなければ自分が結婚できないことを2人は知っているとは断言し、また、手紙の最後のパートでは、国王の姉である自分について良からぬ噂が出回っているのを策を講じるよう強く要請している。この部分では関係詞の *which* とカンマが多用され、一文が非常に長いのが特徴的である。

海軍卿が処刑されると、せめてアシュリー夫人だけは救い出したいと、改めて摂政卿へ書簡を認める(MS Lansdowne 1236, fol. 35)。明快な論理構成を取りながら、摂政卿がアシュリー夫人を解放すべき理由を3つ挙げ、その妥当性をそれぞれ説明していく。エリザベスは、書簡の作成や修辭的な表現技法に関する技術や規範(*ars dictaminis*)をアスカムから習っていたと思われる。古代ローマのキケロ(Cicero)が提唱した説得力のある演説の構成要素(Exordium(序論)、Narration(説明)、Proof and Refutation(証明と反論)、Conclusion(結論))を使っているようにも解釈できる。さらに、末尾を '*Your assured friend to my little power, Elizabeth*' と結んでおり、それまでの力強い言葉に反して「微力」であることを記している。女性は男性よりも劣る(*vulnerability*)というレトリック(Daybell 2001)を使っていると思われる。この特徴はエリザベスの即位後の演説でもよく見られる。

「ワイアットの乱」関連の書簡：

異母姉メアリー一世の結婚に反対するための謀反に関与した疑いでロンドン塔へ移送される命が下ったエリザベスは、無実を訴えるためメアリーへ訴状を送る(State Paper Domestic, Mary I 11/4/2, fol. 3)。書簡では身の潔白を主張しながら、移送される前にメアリーと面会する機会を得ることを懇願する。まず、他の書簡との顕著な違いは、少々乱れた文字と文字列の傾きが見られることである。10代半ば以降のエリザベスの筆跡は均整の取れたイタリック体が特徴であるため、この筆致は注目に値する。そして、加筆

や修正も他の書簡と比べると多く、同じような文言の繰り返しも多い。また感情に訴えるような言葉も使われている。命の危機に瀕した感情の揺れが文字に現れていると考えられる。本文では「姉」と「妹」という関係性を引き合いに出し、どうしても直接会って話したいという気持ちが伝わってくる。一方、結びではこれまでの手紙とは違い、自らを‘your loving sister’ではなく‘Your highness’ most faithful subject’（陛下の最も忠実な僕）としている。さらに興味深いことに、本文と署名との間には 11 本の斜線が引かれており、他人によって加筆されることを防ぐ意図があったと推測される。

#### [ 即位後 ]

即位後は大量の文書を扱う必要性があったため、秘書官や書記官による代筆が多くを占めている。また、自筆の際には筆記速度を高めた草書体を好んでいた。

スコットランド王メアリー一世（Mary of Scots）への書簡

イングランド王位を巡って対立関係にあったメアリーへのエリザベスによる直筆書簡は、調査した範囲では見当たらなかった。メアリーは夫であるダークンリー卿殺害の容疑をかけられ、軟禁状態に置かれた。その後、脱走したメアリーは兵を集めて対抗しようとするものの、異母兄マリ伯の軍に敗れて、宿敵であったエリザベスに保護を求める。

当時、25 歳だったメアリーは処刑されるまでの約 19 年間、城に幽閉された。この幽閉期間に交わされた書簡の中にエリザベスの自筆によるものはなかった。当時の書簡の慣習として、送り手と受け手の関係性が親密であればあるほど、送り手本人による手書きであった（Daybell 2001）。本来であれば親族関係にあり、同じ国王であったという状況から鑑みれば直筆で手紙を認めるのが妥当であると考えられる。しかしながら、直筆でないことを詫げる文言もないことから意図的に代筆させていたと考えられ、エリザベスはメアリーに対して好ましくない感情を抱いていたことが見て取れる。

スコットランド王ジェームズ六世への書簡

ジェームズは母であるメアリーの死刑執行令状にエリザベスがサインしたことを非難すると、エリザベスはジェームズにサインせざるを得なかったことを弁明する手紙を送る。即位後のエリザベスの筆跡は走り書きが顕著な特徴であるが、この一通は他のものとは違って丁寧に認められている（MS Additional, 23240, art.18, fols. 57v-58r）。その手紙を受け取っても怒りが収まらないジェームズに対して、エリザベスはさらに手紙を送る（MS Additional 23240, art.19, fols. 61r-62r）。それまではジェームズのことを‘brother and cousin（兄弟であり従兄弟よ）’と呼んでいたものの、この手紙では「あなたのことを胎を痛めて産んだ子のように愛おしく思っています」と述べ、「母」と「息子」というレトリックを持ち出している。

寵愛していたロバート・ダドリー（初代レスター伯）への書簡

戦地にいるレスター伯を慰めるための手紙を送っている（State Papers Holland and Flanders, Elizabeth 84/9/38, fols. 85r-86v）。コピーしか現存していないものの、その口調からエリザベス本人が自ら認めたものだといえる。親しい間柄を暗示するかのようになり「Rob」と呼びかけたり、大きな瞳をしていたレスター伯の愛称を記号で記したりと、他の書簡では一切見られなかったような特徴が確認できる。また、結びも他の人物への書簡とは異なり、‘As you know, ever the same, E.R.’と書かれ、変わらぬ愛情を示唆している。

#### [ 晩年 ]

即位後は筆記速度を高めた書体を好んでいたのに加え、晩年はリウマチを患っていたことが拍車をかけて走り書きのような草書体になっているのが特徴的である。手紙を認めることがそう容易にできなくなったにもかかわらず、後継者となるスコットランド王ジェームズ六世とフランスのヘンリー4世への書簡だけはエリザベスが自ら認めることが多かった。しかし、自分の字の汚さを度々書簡の終わりで詫げていたり、読解が難しい書簡には秘書官による写しが添えられたという記録も残っている。

エリザベスが崩御するまでの約 20 年間に認めた後継者となるジェームズへの書簡は、イングランドがスペインの無敵艦隊を撃破した頃、つまり、エリザベスが国防に苦心していた頃から死の直前までとなる。生涯を通じて未婚であったエリザベスには常に後継者問題が付きまとった。最終的に王位を継いだのは 30 歳ほど歳の離れた従兄弟のジェームズであった。彼はエリザベスと王位を巡って敵対関係にあったスコットランド王メアリー一世の一人息子で、幼くして王位に就いた。次期国王となるべく名乗りをあげるもエリザベスから正式な指名を受けられず、イングランドの枢密院や他国の協力を得ようと画策する。

他の書簡の受け手とは違って、ジェームズに対してはエリザベスによる自筆が多いため、その関係性を重視していたことが伺える。考察結果として、この 20 年間の間に認められたジェームズへの書簡には 2 つの機能が見られた。一つは他国の脅威からイングランドを守するためにスコットランドとの友好関係を維持するための機能、そして、もう一つは譲位に向けた後継者教育の機能である。まず、前者の機能を持つ書簡については、機密情報を含むものが多かった（例えば、MS Additional 23240, art. 6, fol. 19）。エリザベスが認めた書簡は受け手に届くまでに他の人物によって読まれてしまう可能性が常にあった。情報の秘匿性という観点から、故意

に人物名を明記しない、もしくは婉曲的に物事を伝えるという特徴が見られた。また、信頼関係を軽んじるジェームズの振る舞いに対して厳しく嗜めたり、血のつながりに言及しながら優しく助言するといった手法が効果的に使われている書簡もある。また、国王や国家を指す代名詞‘we’は、後継者となるジェームズへの書簡の中で巧みに使用されており、‘we’にジェームズ(スコットランド)を包括することによって説得のレトリックとして機能している(MS Additional 23240, art. 7, fol. 23)。晩年は精神的に病んでいたという報告もあるが、死ぬ間際まで後継者となるジェームズに手紙を送り続け、国王としての責任感や祖国への愛(amor patriae)を強く抱いていたことが伺える。また、ラテン語の格言を挿入したり、比喻などの修辞技法を用いたりしながら、国王たる姿勢を示すような文言も見られた。

(3) 国民意識の高揚や英語の評価の高まりを、国民言語としての英語にいかなる言語観を持っていたのか

幼少期は家族への手紙をラテン語やフランス語で認めることがあったものの、1549年に英語が英国国教会の言語となると(The Act of Uniformity)、それ以降、英語を共通言語とする相手には英語のみで手紙を送るようになった。彼女は国王として政治的な安定と宗教的な中庸を重視し、宗教的寛容政策をとっていたのだが、言語使用においても一貫して英語を使い続けた。イングランドの宗教改革(1534年)および16世紀末のスペインとの対立関係の中でイングランドの国民意識(nationalism)が高揚した時期にあり、自国語である英語の価値を上げることを重要視していたと考えられる。父であるヘンリー八世や異母姉メアリー一世はすることがなかった議会での演説や兵士を前にした力強い演説も残っている。エリザベスが意図的に英語の変化を牽引したという証拠は見出せなかったが、エリザベス自身の言語使用では変化の先取りをしていた傾向が高かったと言える。

研究開始当初は予期していなかったこととして、まず、新型コロナウイルス感染症の流行により、当初予定していた英国での自筆書簡の画像データの取得が十分にできなかった。一部はデジタル化サービスを利用して入手できたものの、国の公文書で歴史的価値が高いことから現地での閲覧のみ可能な書簡もあった。予期していなかったもう一つのことは、領域横断的研究の可能性を見出すこともできたことである。エリザベスからジェームズへ送られたある書簡はエリザベス直筆の書簡として所蔵機関で登録されているものの、筆跡などから他者が描いたものではないかと推測された。そのため、画像分析を専門とする研究者と一緒に登録情報の信憑性について明らかにすべく画像データを分析しようとしたものの、データ処理するには画像の解像度が低いことが判明した。

今後の展望としては2つ考えられる。まず、既述した書簡の鮮明な画像データを入手し、画像分析を試みることである。そして、もう一つは、エリザベス一世の演説原稿を分析し、本研究での調査結果と比較することである。景気不安と緊迫化する国際情勢で先行き不安な現代、各国のリーダーたちの言動にも注目が集まっている。幾多の困難を乗り越えて来たエリザベス一世の演説を分析・再評価することで、先行きが不透明で将来の予測が困難な現代社会が得るべき示唆があると期待する。

[ 引用文献 ]

- Daybell, J. (ed.). (2001). *Early modern women's letter writing, 1450-1700*. Palgrave Macmillan.
- Evans, Mel (2013) *The Language of Queen Elizabeth I: A Sociolinguistic Perspective on Royal Style and Identity*. Wiley-Blackwell.
- Gibson, J. Petrina, A., & Tosi, L. (eds.) (2011). *Representations of Elizabeth I in early modern culture*. Springer.
- Harrison, G. B. (1968). *The Letters of Queen Elizabeth*. Funk & Wagnalls.
- Marcus, L. S., Mueller, J. & Rose, M. B. (eds.) (2000). *Elizabeth I: Collected Works*. University of Chicago Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 平 歩	4. 巻 6
2. 論文標題 エリザベス一世の書簡における否定接頭辞UN-とIN-の使用傾向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州工業大学教養教育院紀要	6. 最初と最後の頁 125-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 向井 剛	4. 巻 第36号
2. 論文標題 宗教改革前夜のサイオン修道院	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 キリスト教文学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平 歩
2. 発表標題 エリザベス一世による『詩論』英訳－訳文の言語的特徴と解題の試み
3. 学会等名 近代英語協会 第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 向井 剛
2. 発表標題 宗教改革前夜のサイオン修道院
3. 学会等名 日本キリスト教文学会 第47回全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	向井 剛 (向井毅)  (Mukai Tsuyoshi)  (40136627)	福岡女子大学・公私立大学の部局等・学長    (27103)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------